

事例

牧場と学校が連携したオンライン酪農体験授業の取組

吉田牧場（埼玉県）

埼玉県秩父郡小鹿野町^{ちちぶぐんおがのまち}の吉田牧場では、乳牛約80頭を飼育しており、生産する生乳のほとんどが地域の小・中学校の学校給食に提供されています。また、生乳を生産するだけでなく、酪農教育ファーム¹の活動にも力を入れており、酪農教育ファーム認証牧場²として、子供たちに、酪農体験の場を提供するとともに、学校に出向く出前授業等を実施してきました。酪農体験には、年間約500名の子供たちが参加し、牛への餌やりや牛舎の掃除、牛の乳搾り、アイスクリーム作り等を体験していました。しかし、感染症の感染拡大の影響により、こうした活動を行うことが困難となりました。この状況を打破するため、学校に協力をお願いして令和2（2020）年9月頃から、オンライン酪農体験授業の取組を開始しました。

オンライン酪農体験授業では、事前に、吉田牧場がオリジナルで作成した紙芝居「牛の一生」、「牛のからだ」、「人間と牛とのかかわり」を使った授業を学校の先生が行ったり、子供たちからの質問を受け付けてメールでやり取りすることで、子供たちの酪農への興味を高めます。その後、牧場と教室をオンラインでつなぎ、牧場内の様子や、子牛に牛乳を飲ませたり、牛の乳搾りをする様子を見せると、教室は大いに盛り上がりします。映像で見てもらうだけでなく、実物大の牛が描かれた布や、牛が実際に食べている餌を教室に用意することで、五感を使って子供たちに牧場の様子を少しでも体感してもらいます。すると、子供たちからは、「牧場に行ってみたい!」、「やってみたい!」といった声が自然に上がってきます。子供たちとのコミュニケーションも大事にしており、一人一人からの質問に答える時間も設けます。例えば、「乳牛としての役目を終えた牛の肉を食べることは悲しくないか。」という質問に対し、「悲しいけれど、食べられずに捨てられてしまうことが一番残念なので、「ありがとう」という気持ちを持って食べる。」と回答するなど、命を感謝の気持ちを持って残さずに頂くことの大切さを伝えます。そして、感染拡大の状況が落ち着いたら牧場に遊びに来てほしいと呼び掛け、授業を締めくくります。授業の後は、授業中に答え切れなかった子供たちからの質問をメールで受け付けることで、子供たちの酪農への関心を絶やさないようにします。

始めたばかりの取組であるため、試行錯誤しながらの授業ではありますが、「子供たちの気持ちを牧場につなぎとめたい」、「感染拡大が収束したら牧場に遊びに来てもらいたい。」という思いを持って、これからもオンライン酪農体験授業の取組を続けていきます。



授業の様子



実物大の牛が描かれた布

1 「食やしごと、いのちの学び」をテーマに、主に学校や教育現場等と連携して行う、酪農に係る作業等を通じた教育活動を行う牧場等のこと。一般社団法人中央酪農会議ウェブサイト参照：<https://www.dairy.co.jp/edf/gaiyo.html>

2 酪農教育ファーム推進委員会（日本における酪農教育ファームの推進を目指し、一般社団法人中央酪農会議の提唱により、教育関係者と酪農関係者の協力を得て設立された団体）が定めた認証規程に基づき、安全・衛生対策等をクリアして認証を受けた牧場等のこと。一般社団法人中央酪農会議ウェブサイト参照：<https://www.dairy.co.jp/edf/sikumi.html>